



占領下日本の都市空間に関する史的研究 一神戸におけるヤミ市の生成と展開に着目して一

村上, しほり

(Degree)

博士 (学術)

(Date of Degree)

2014-03-25

(Date of Publication)

2016-03-25

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

甲第6169号

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1006169>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



(別紙様式4)

論文内容の要旨

氏 名 村上 しほり

専 攻 人間表現専攻

指導教員氏名 梅宮 弘光

論文題目 (外国語の場合は、その和訳を併記すること。)

占領下日本の都市空間に関する史的研究—神戸におけるヤミ市の生成と展開に着目して—

論文要旨

本論文は、神戸のヤミ市を舞台とした多様な主体の生活過程を題材に、その具体相を再現的に明らかにし、都市空間の建築物や構造物の形成と変容過程といった空間構造とともに、担い手である社会集団や個人といった人間の動態と、折衝・交渉・議論を繰り返す環境形成のプロセスを読みとり、空間と社会の相関的な変容を検討することによって、占領下日本の都市を論じる基礎をなすことを目的とする。

本論文の構成は、序章、本編4章、結章からなり、補足的な位置の付章がつく。

第1章では、占領下の神戸にヤミ市が生成する社会的背景として、近代神戸の都市空間の変容過程と終戦直後の民衆と行政の復興へ向けた営為の衝突を概観する。神戸の市街地を東西に縦貫する国有鉄道は、昭和初期の高架化工事完了後に計画された、鉄道省や神戸市による高架下への店舗兼住居建設は、1937年の日中開戦にともなう建築資材の統制によって頓挫した。高架下の山側には部分的に鉄道省の直営倉庫が建設され、中央と浜側の空地は、神戸市が鉄道省から道路用地として無償で借り受けたままに終戦を迎えた。

第2章では、戦後神戸の都市空間をめぐる進駐軍の動向による空間的表象に着目し、①日本への占領政策のはじまり、②地方都市における言説空間管理のはじまり、③地方都市における進駐と都市空間管理のはじまりと展開という3段階のスケールから検討する。1945年9月から1949年11月までのGHQメディア検閲が新聞・雑誌に及ぼした影響を把握し、ヤミ市や進駐軍兵士の動向が検閲対象項目であったことを指摘したうえで、当該期の『神戸新聞』の史料的安全性と信頼性を検討した。この検討は、戦後期に関する歴史叙述そのものを問いなおす意味を持つ。これを踏まえて、言論統制によって不可視化されていた占領初期の都市空間の状況を捉えなおすと、GHQによる言論と物理的空間への管理統制は、想定外の状況に対応して漸次的に実施されていた。戦後神戸における占領と都市空間の空間的表象をみると、住民との関わり、接収、街路空間への規制といった進駐軍の動向が明らかになった。都市の物理的空間への管理統制は、1946年7月から10月にかけてのヤミ市撤去指令によってすすめられた。GHQは統制経済の綻びの象徴的な現象としてヤミ市を警戒したが、兵庫県は露店から店舗形態を発展させた市場空間を自主的な復興の一形態として評価した。地方行政によるヤミ市への対応は不統一であったため、さらなる管理の徹底と秩序維持を目指し「連合国占領軍の占領目的に有害な行為に対する処罰等に関する勅

令」が7月15日から実施された。これに基づいた処罰内容の確定によってヤミ市への警察の方針は明確化し、8月1日から、全国的に連合国占領軍と日本警察とが一体となった公権力による強制撤去が行われた。なお、兵庫県においては漸進的な取締による健全化が図られたが、隣接する大阪府や京都府を追われたヤミ商人の流入による三宮のヤミ市の治安悪化に応じて、露店移転方針へと改められた。

第3章では、戦後神戸におけるヤミ市の生成と変容について、三宮・元町地域と湊川新開地一帯における民衆の環境形成の初動に着目し、『神戸新聞』記事と進駐軍関係者や日本人写真家の撮影による画像資料を史料として、日々の動態と主体間のポリティクスが織りなす空間的表象を描く。

占領初期の神戸市中心部では、民衆・行政・GHQのあいだの思惑の衝突や折衝によって、めまぐるしい環境の変化がみられた。ヤミ市は、秩序や規範が崩壊した混乱する戦後都市社会を象徴した空間であった。近代化にともなって生活・交通・産業を支えるインフラ施設が整備された神戸の市街地は、第二次世界大戦末期の空襲によって焦土と化し、焼け跡に残された都市構造の骨格をなす街区や交通施設は、行政による復旧を待たず、民衆によって利用されはじめた。

湊川新開地のヤミ市は早期にテキヤ組織と兵庫署に制圧されたが、三宮のヤミ市は遊歩道として用いられた街路空間という場所の性質に起因して殷盛をきわめ、1945年12月からは「三宮自由市場」と呼ばれるようになった。戦災者や配給を受けられない在留外国人の生活救済の機能も担っていたために行政の取締りは漸次的なものに止まり、統制経済における禁制品や価格違反の提供を取締まるも、違法行為は消えなかった。これを舞台とする主体間の駆引きは、社会集団・行政・GHQによる協議・交渉のプロセスが設けられた点において特徴的であった。境遇を異にする民間人が、日々移ろう情勢のもとで居住し生業を営む空間を求めた具体相には、多層的な社会関係の生成がみられた。民衆がGHQや地方行政との折衝を繰り返すうちに、GHQによる自治統制の推奨を受けて営業者は組織化し、新たな地域の有力者が台頭しはじめた。GHQが街路の露店群に対して撤去を命じた1946年夏には、複数の商業組織が対策を講じ、地方行政への折衝や、独自の裁量でのマーケット建設と行政の事後承認もみられた。

ヤミ市と異なる経緯で同時期、近接する地域に生じた小売市場と商店街は、統制経済の順次撤廃と物流の改善を果たした1948年から急速に復興が進んだ。兵庫県では、港湾・鉄道・道路等の発達した交通網を用いた公認の個人輸入による食料調達が行われ、生活再建に初速を与えたが、一方で、他地域との結節点となる立地はヤミ取引助長の一因でもあった。

第4章では、第3章で明らかにした戦後神戸のヤミ市の展開によって生じた市場や商店街と周辺地域を事例として、終戦直後から高度成長期、再開発を経て現在に至るまでの神戸の都市空間の履歴を実証的に明らかにする。戦後神戸市において、三宮自由市場という大規模なヤミ市の内外には駆け引きがうずまき、形勢は日々移りかわり、取り締まる側のGHQや行政と多様な営業者の繰り返す折衝は、営業者の組織化と自治統制の傾向を生んだ。自由市場撤去に際して、商業組織として新たなマーケットや商店街を形成しはじめる人びとの動きとその後の展開について、「三宮国際マーケット」「三宮ジャンジャン市場」「三宮高架商店街」「元町高架通商店街」「湊川公園商店街」の5事例を取り上げた。

三宮国際マーケットは、朝鮮人自由商人連合会という商業組織を主体として、三宮東地区の2街区に形成された。1946年8月から10月にかけて三宮自由市場の路上店舗の移転先として、雲井通6丁目と旭通4丁目に約600戸の店舗兼住居群が建てられた。この建設に際しては、神戸市と県警の協力によって、自由商人連合会と不在地主のあいだに借地契約が結ばれ、これを主導した自由商人連合会の発展的解消によって成立した朝鮮人商業経済会は、国際マーケットのテナントの管理組織となった。

ゴム製品と玩具・菓子の卸売営業の店舗兼住居が雲井通6丁目と旭通4丁目に集積し、1950年にゴム製

品の統制が撤廃されてからは、雲井通6丁目の営業者は激しく入れ替わった。1950年代後半からは在日朝鮮人の帰国事業によって営業者が定着せず、その間隙に麻薬や売春といった社会悪が持ちこまれた。1960年から1970年にかけてかたちづくられた悪場所のイメージは、1970年代にはじまる再開発で性格を変えてもなお払拭されがたいものであった。また、朝鮮人自由商人連合会のイニシアチブによる国際マーケットの開業は、民間人による「開発」としての性格の強さが読みとれる計画的な商業施設の建設であった。これは、在日朝鮮人商業者による積極的な選択として、自ら選んだ戦後都市における集住の一例であったと指摘できよう。

三宮ジャンジャン市場は、1945年末の路上店舗撤去時に加納町5丁目と三宮町1丁目北東部の空地へと移った、日本人による50軒の店舗兼住居群であった。発生当初は営業者組織がなかったが、安価な飲食業を営む店舗が集まって商業組合を結成した。狭い路地には板をわたし、3ヵ所の入口にアーチをかけ、衛生面にも配慮した営業が目指された。代表的な客層は港湾労働に従事する日雇労働者で、1947年には朝4時から夜11時という長い営業時間で1日5000人もの客を集めていた。飲食営業店舗への規制が厳しかった1940年代末には、ジャンジャン市場は労働者の生活救済に貢献するものとみなされて営業継続が許可され、立地の良さから客層も多様化して賑わいは途切れなかった。

同市場を含む三宮駅南側一帯には、戦後、自然発生的にバラックが建設されて過密地域があらわれた。戦前の同地には、長屋などの住宅や製紙会社、貿易会社が建ちならび、商業集積は小規模であった。現在では神戸の中心的なショッピングモールとなった三宮センター街も、戦後初期の商業集積を活かして1946年に誕生した新興商店街であった。1950年以降、センター街を中心とする三宮西地区が華やかでいくなか、同市場は異彩を放つ空間として、戦後神戸の格差の象徴となっていった。戦災復興土地地区画整理事業のうちに収まらなかった三宮地区の市街地整備は、1970年前後に三宮地区市街地改造事業として街路拡幅と一体に行われた。このエリアに含まれたジャンジャン市場は、1965年に三宮地域で発生した大火を契機に立退きが進んだ。なお、往時の同市場の客層は、神戸港や焼け跡整理、土木整地等の日雇労務に従事する都市雑業層であった。三宮駅南の緑地帯を求職の場とした労務者のうち、住居を持たない者は浮浪者と呼ばれ、阪神三宮駅から通じる地下道を居住の場とした。同地一帯は、自然発生的に戦後神戸のアジールとして居住と労働をめぐる都市問題を可視化した場所であったが、再開発によって姿を消した。

鉄道高架橋下部空間において生成した戦後都市商業集積は、全国各地でみられる。兵庫県下の代表的な事例である、JR三ノ宮駅から元町駅、元町駅から神戸駅のあいだの高架下で営業を続けるヤミ市出自の商店街の形成経緯と変容過程を明らかにした。

市街地を東西に縦貫する国鉄の高架下には、戦後まもなく市内最大規模のヤミ市が生成し、三宮から元町、そして神戸駅のあいだの鉄道高架下空間には新たな商業集積が生じた。窮乏期であった時代情勢も鑑みた特例措置として、市は、浜側に建ち並んだ店舗群に対して道路占用許可と露店営業許可を出し、連続型店舗を形成する動向も容認した。高架橋建設当初の計画とは全く異なる経緯で形成された商店街は、統制下でもつねに数多くの物資が集まる場所となり、暗く狭いという戦前のイメージを覆した賑わいの空間があらわれた。これは、戦後的な盛り場の生成現象の象徴的な事例であった。

三宮自由市場が股賑をきわめた1946年上半期には、元町―神戸駅間の高架下の店舗群は、松明会という博徒系組織に統括されたが、場代の徴収に不満をもった営業者たちは商店街組織の結成を目指し、1946年12月に元町高架下商業協同組合として発足した。これには、1946年夏の三宮自由市場の大規模撤去によって周辺環境が変わりつつあった時勢が影響した。高架下において料理飲食業を営んだ約200軒の露店群は、1947年から1949年にかけて発令した飲食営業緊急措置令と続けて実施された飲食営業臨時規整法によって「ヤミ」営業であるとの烙印を受けた。しかし、外食券食堂・旅館・飲食店に限っ

た営業許可が降りたために、「喫茶店」として申請するものや、古着屋に転業するものが多くみられ、昼夜で場所の性格を切り替える対抗策によって喫茶店や衣料品を扱う店舗の比率が増えた。

また、商店街組織は営業権獲得に向けて、市と国鉄を相手に20年をかけた交渉を展開した。元町高架通商店街浜側の店舗については、高架橋建設当初に歩道として整備する計画で、JRから神戸市へと貸された土地であった。戦後まもない時期の高架下空間に対する神戸市の対処的な姿勢は、複雑な権利・所有関係を招いた。1953年の道路法改正によって占用許可の基準が明記されたのちは、国鉄と神戸市と地元店舗群の三者による協議折衝が続いたが、国鉄が譲歩するかたちで折合いがつけられ、1976年に統一的な店舗形態へと全面改築を果たした。

湊川公園商店街の開業経緯からは、1946年上半期の引揚者や復員者が異なる労働環境に馴染めず就業困難であった状況が読みとれた。当該期の求人は復興事業や進駐軍労務が多く、大半は肉体労働であったため、頭脳労働や商売に長けた引揚者の生活救済を目的として、約300戸の店舗兼住居群が建てられた。計画の主導者は、元神戸市議で上海引揚者の華中引揚兵庫県人互助会会長であり、市や近隣事業者の協力をとりつけて引揚者主体の商店街を開業した。1950年3月から6月には、日本貿易産業博覧会「神戸博」が王子公園を第一会場、湊川公園を第二会場として開催された。第二会場となった湊川公園においては、博覧会開催1年前の1949年3月末に商店街への占用許可が打ち切られていたが、交渉は捗らず、開会直前によく全戸の立退きが完了した。神戸博が終了したのちには、公園内に不法占拠がふたたび増加し、1966年から環境浄化運動がはじまった。居住者222人と神戸市のあいだに交渉が繰り返されたが、難航した話し合いの末、公共企業体によるビル建設と神戸タワーの取り壊しが決まった。

いずれの事例も住宅不足の状況下で店舗兼住居群の新興市場や商店街を形成し、特徴ある営業によって活況を呈したが、時期を経て復興が進む世相においてその位置づけは変わり、やがて周縁化していった。それぞれの場所の、物質的環境や立地などの空間構造と、内外の人びとの社会的属性や社会集団の性質に規定されつつ営業継続に向けて展開した動態の相関性から、記録されてこなかった戦後神戸の変容過程を捉えなおした。

以上を通して、占領下神戸における民衆の生活過程の変遷を、多様性、国際性を孕んだ狭い都市社会という神戸の歴史的・地理的文脈に即して明らかにしたところ、混乱期と概括されてきた占領期の都市空間における、積極的かつ活発な提案や交渉や議論とこれによる環境形成が浮かび上がった。民衆の視点からみたヤミ市とは、農業・工業の増産や改善すべき物流という問題を、ときに助長、解消する両義的な存在であった。地方行政である神戸市は、初期には民衆の生活を第一に考えたフレキシブルな救済活動に取り組んだが、進駐軍が駐留をはじめ、治安を乱す街路空間のヤミ市の撤去が命じられてからはこれに従う施策に転じた。つまり、ヤミ市撤去という都市・街路空間の秩序化は、占領軍の日本統治構想における重要課題であり、日本国内の民衆や地方行政にとっては副次的な問題にすぎなかった。

付章1では、占領下神戸の都市観光事業の初動に着目して、昭和初期に展開された国際観光政策の戦争を経た変化を垣間みる。占領下の都市空間を異なる角度でみると、当該期の外貨獲得を目指した外国人観光客向けの興行街、娯楽街の復興は、ヤミ市の展開と空間的に重なりあっていた。付章2では、神戸市の戦災復興計画に関する懸賞論文における地理学者の入選作と背景を取り上げ、同事業が復興提言の募集としてのみならず、市民の生活再建の契機でもあったことに、当該期の民衆生活の一端をみた。

論文審査の結果の要旨

氏 名	村上 しほり		
論文題目	占領下日本の都市空間に関する史的研究 ー神戸におけるヤミ市の生成と展開に着目してー		
判 定	合 格		
審 査 委 員	区 分	職 名	氏 名
	主 査	教授	梅宮 弘光
	副 査	教授	小高 直樹
	副 査	准教授	大田 美佐子
	副 査	教授	平山 洋介
	副 査	教授	澤 宗則
要 旨			
村上しほり氏の博士論文は、占領下日本の都市空間に関する史的研究に資することを念頭に、神戸におけるヤミ市の生成と展開を明らかにすることによって、都市で展開された多様な個人／集団の生活過程と、それによって形成された空間を、社会と空間との相関的変容過程として明らかにすることを目的とするものである。 ヤミ市に象徴される戦災復興期の都市空間は、文学やポルタージェ、絵画や映画などの映像表現には多く取り上げられてきたものの、学術研究の対象としては十分には捉えられてこなかった。それは、都市行政の実務においても、行政学、都市計画学、建築計画学の立場においても、それらがつねに解消すべき存在であり、特定の時代状況下における人間的営為の結果としての積極的な意義が見出されなかったことによると思われる。しかし1970年代半ばより、社会学、地理学、都市論の分野において「考現学」的あるいはデザイン・サーヴェイに発する関心が、まずジャーナリズムに現れ始め、次いで1980年代以降には、学術的成果が世に問われるようになってきたものの、いまだ地域限定的な段階である。 本研究はそうした先行研究の成果をふまえたうえで、ヤミ市とその周辺を時代に特有の構造物＝環境として積極的に捉え直した。緻密な調査を通して神戸のヤミ市とその生成・展開過程を生き活きとダイナミックに描きだすことに成功しており、結果として、その生成過程と実相を、「占領」の空間表象として明らかにし、このテーマに新たな知見を加えた点に意義がある。 以下に各章の概要と、そこでの成果を示す。 第1章 戦後神戸における都市環境形成の社会的背景 三宮地区と湊川新開地地区に関する明治期以降、昭和戦前期までの空間変容と、戦			

後における戦災復興計画と経済統制の住民への影響を論じ、第2章以降の準備としている。

第2章 戦後神戸における占領と都市空間ー進駐軍の動向にみる空間的表象

連合軍の神戸への進駐が、従前の都市空間をどのように変容させ、また新たな都市へと変容させたのかを検証し、占領下の言論統制によって不可視化されていた占領初期都市空間の状況を捉え直し、次のことを明らかにしている。①GHQによる言説空間と実体的空間への管理統制は想定外の状況に対応して漸次的に実施された。②実体的都市空間として、進駐軍向け慰楽施設の分布、GHQキャンプの内部構成、街路空間における露店営業統制の実態。③GHQの動向、それを受けた日本警察の取締り厳格化、対する兵庫県による柔軟で漸進的取締り方針が、結果的に、隣接府県からのヤミ商人流入、三宮ヤミ市の治安悪化を招来し、露店移転方針を生み出したこと。

第3章 占領下神戸におけるヤミ市の生成と変容ー中心市街地にみる民衆の初動

三宮・元町地域と湊川新開地一帯における民衆の環境形成の初動に着目し、『神戸新聞』記事の悉皆調査と当時の神戸を撮影した図像資料の検討により、戦後神戸におけるヤミ市の生成・変容過程を、次のように明らかにしている。①在留外国人を含む多様な生活者と統治権力の関係において両者を仲介する多様な個人・集団が発生した。②民衆がGHQや地方行政との折衝を繰り返しながら、GHQによる自治統制の推奨を受けて営業者は組織化し、新たな地域の有力者が台頭した。③ヤミ市とは異なる経緯で生じた小売市場や商店街では、1948年以降急速に復興が進むが、一方で、地域との交通結節点として有利なことから、ヤミ取引が助長される地域もあった。

第4章 戦後神戸におけるヤミ市の展開ー新興市場・商店街の発生と変容過程

第3章で明らかにした戦後神戸におけるヤミ市展開の具体的事例として「三宮国際マーケット」「三宮ジャンジャン市場」「三宮高架商店街」「元町高架通商店街」「湊川公園商店街」の実相を、新聞記事悉皆調査、関係者インタビュー調査、住宅地図、空中写真、土地台帳・閉鎖公園、古写真などから出来る限り実証的に明らかにした。これらは一時的に活況を呈するも、やがて周縁化していく。これまで顧みられることのなかった、こうした地域の形成・変容過程を神戸の戦後史において捉え直した。

結章 占領下神戸の都市空間とヤミ市

ヤミ市は、占領期の都市空間において、多様な個人・集団・公権力が、その協調的／対立的な立場を相互に入れ替えながら時代状況に対応しようとした関係性の力学ーポリティクスーの空間的表象といえる。ヤミ市は、つねに解消が求められる負の空間であると同時に、その解体によって内部に胚胎された新たな可能性が次代の経済空間を生成する孵化器的空間でもあった。

付章1 戦後日本における観光事業の変容ー神戸の都市観光を事例として

付章2 神戸市の「戦災復興に関する懸賞論文」（1946年）入選作・福見悦治「戦災都市神戸復興に関する構想」について

本研究は占領下日本の都市空間について、その生成と変容の過程を神戸におけるヤミ市に着目して研究したものであり、都市の歴史的研究について重要な知見を得たものとして価値ある集積であると認める。よって、学位申請者の村上しほりは、博士（学術）の学位を得る資格があると認める。

【本論文の執筆過程で公開された査読付き論文】

- 村上しほり「三宮東地区（三宮国際マーケット）の形成と変容過程についてー戦後神戸におけるヤミ市と市街地形成に関する史的研究」『日本建築学会計画系論文集』Vol. 78 No. 693（2013年11月）pp. 433-438
- 村上しほり「戦後神戸における都市環境形成に関する研究ーJR元町-神戸駅間鉄道高架下における店舗形成と変容過程に着目して」『神戸大学大学院人間発達環境学研究科紀要』第7巻第1号（2013年9月）pp. 87-93
- 村上しほり「戦後神戸市における盛り場の変容とヤミ市の形成ー新開地と三宮の戦災復興初期過程を事例として」立命館大学生存学センター『生存学』第6号（2013年3月）pp. 278-297
- 村上しほり、梅宮弘光「戦後神戸におけるヤミ市の形成と変容ー（三宮自由市場）の事例を中心に」『神戸大学大学院人間発達環境学研究科紀要』第4巻第2号（2011年3月）pp. 69-81